

185  
804  
5

第一



ヒ  
ハ

書  
ノ  
子

印  
ノ  
子



○寺嶋ノ石叟ガイロ。予始メ諸或彼是ト言扱ヘル。其實ヲ云ハハ。成  
 程ト思フイ有リ。ユエハ頃口別テ懇トナリテ。叟モ胸襟ヲ披クニ及ブ。  
 予一日訪ヒタルニ折フニ病ムイ有リ迎卧床ニ引テ逢ヘリ。然ルニ枕頭  
 黒塗ナル匣アリ。金書ニ題メ大乘妙典ト時字ス。予云フ其宗經ハ叟  
法華宗殊ニ崇信ナリトハ申シナガラ。斯ク側ニ置給フイ。仰グベシ。某モ受崇ノ  
 一部有シガ。去春ノ災ニ焚亡ヌト語タレハ。叟答フコトハ拙子ガ自寫セ  
 シ者ナリ。失禮ナカラ視給ベシ迎匣ヲ啓テ出ス。視ルニ表装ハ云ニ  
 及バハ。經文悉ク自寫メ字傍亦國字假名ヲ添ヘ朱句ヲ施タリ。其謹  
 密賞スベシコレ愚カ英雄ノ眼ヲ以テ論セバ。奈シトカ謂ベキガ。又叟ガ慎  
 勤ハ察スベシ以茲スレバ。御所様ノ御採用モ惟ヒ奉ルベシ。叟ハ不愚者

カ頃口懇スレハ漸弥堅キヲ知ル

○日成録ノ遺漏ヲ絶ヘズ又復シルス

二月廿七日沙汰書

銀七枚

沙汰奉引格  
沙汰奉引格

豊孫省吾

西九沙普信沙用、成初、成後、成生、成調、方格、制、持、在、沙、用

心用、成、初、成、後、成、生、成、調、方、格、制、持、在、沙、用

同五枚

沙汰奉引格

花田仁三藏

同三枚

同吟味方改後並

千田兵藏

西九沙普信沙用、成初、成後、成生、成調、方格、制、持、在、沙、用

骨打、成、初、成、後、成、生、成、調、方、格、制、持、在、沙、用

右ノ作付、成、初、成、後、成、生、成、調、方、格、制、持、在、沙、用

二月廿九日

交替奉引格

神原誠中書

沙普信(一)元

大沙普信

菅沼織初正

各代、菅沼、漢太郎

西九沙普信、成初、成後、成生、成調、方格、制、持、在、沙、用

交替奉引格

松平三郎忠邦

同、成、初、成、後、成、生、成、調、方、格、制、持、在、沙、用

右ノ作付、成、初、成、後、成、生、成、調、方、格、制、持、在、沙、用

沙普信(一)元

同

中堂内藏助

日新亭上之合江洲因途于水成公舟下

右打所白書院縁類列在回若同人中

若松滿次郎

知久之教

中嶋共五郎

信濃之在吾

三州之在吾

竹登一足

旧制之在吾

右於躑躅之洞列在回若同人中

三月朔日

高家

宮本澤三六郎

武田大膳大夫

榎原駿河守

留山長門守

由良播磨守

大津右京大夫

織田大亮大輔

有馬多初大輔

大久保之雁正

右代薩州八郎基

駒木根大内記

右河美濃守

遠府所城代

伊豆守居

時服立克

牧丹波書

勇我伊豫書

林 大月記

朝倉播磨書

石川伊豫書

船越河内書

小笠原長門書

戸田隼人三

板田筑後書

西丸沙書信 舟上全仕沙風途 古在殿公舟上

西丸書在次第

在馬督家老

大沙書次

右於芙蓉、間掃部次老中列在備後書中

同

表馬家

織田藩之助

同制舟上

右於菊、間列在同年同人中

三月二日

西丸沙書信之最初

沙舟子在形

土岐丹波書

右於 御前書 御前

同月日

沙書院書次

大久保紀伊書

朽木周防書

久貝因幡守

小笠原長門守

酒井德政守

高井但馬守

菅沼伊賀守

渡野重江守

秋田淡路守

中多野馬守

土登伊賀守

加藤伊勢守

時辰五ノ

西元書院書院

左將標内書院書院

伊山世祖書院

因三ノ

同五

赤藤内務助

同三

近藤右見守

同六ノ

坂浦出雲守

逸見甲斐守

同三

西元書院書院

藤掛出羽守

同五

本多日向守

同三

志山安藝守

同五

関 播磨守

同三ノ

左將標内書院書院

酒井肥前守

武田和泉守

同五

宮内少輔家老

本多佐治守

同三

民部少輔家老

荒川豊前守

佐野日向守

同五

左衛門尉家老

大久保筑前守

酒造徳次守

同三

大目付

久世伊勢守

初鹿野河守

同五

土登紀伊守

神尾山城守

同三

町奉行

丹羽近江守

跡部信濃守

御郡定在形

筒井紀伊守

内藤隼人守

同五

明樂飛騨守

御旗奉行

深谷遠江守

神尾豊後守

梶野土佐守

御作奉行

井上坂右守

松平豊前守

小普請奉行

野田伊勢守



甲府御番支配	石川土佐守
長崎奉行	牧野駿河守
京坂町奉行	在代池田将監
同	在代土佐磨守
同	田口加賀守
同	在代石川播磨守
同	佐橋長門守
同	在代山岡恒三守
同	本多筑前守
同	在代池田将監

大坂町奉行	堀 伊賀守
山岡奉行	在代 同人
日光奉行	柴田出雲守
在代奉行	在代石川播磨守
在代奉行	山岡恒馬守
在代奉行	稻生出羽守
在代奉行	在代山岡恒三守
在代奉行	本多淡路守
在代奉行	在代桑名左衛門
在代奉行	曲岡甲斐守
在代奉行	在代石川播磨守

浦安奉行

池田將監

伊澤美濃守

名代池田將監

朽木騷兵衛

新庄長門守

山中輝勢守

吉松土佐守

西丸序辰守居

西丸序辰守居 上令仕所用途 古在殿外府より

右於芙蓉之間掃部以老中地者當俵守列在俵後守中御

内本丸西丸 右大将様若年奉中侍在

同月四日

時辰守

町奉行

幸山左衛門尉

西丸奉行

土岐丹波守

西丸組

室賀去庫

西丸奉行

中山五郎左衛門

勝 志摩守

三洞土佐守

村瀬長門守

小普信組支配

左衛門辰吉

酒井八八守

大島甲斐守

津田美濃守

坪内左京

佐野大隅守

小堀織部

長谷川修理亮

酒井采女

内藤惠助

近藤織部

能勢帯刀

西丸新左衛門

伊持一氏

大津返

本多主水

石田边江守

仙石能登守

德永伊豫守

松平織部正

石川周帳守

小笠原源三少弼

飯沼俊宗守

水野出雲守

青山伊賀守

中奥山内

松平美作守

岡部統前守

溝口讚岐守

花房誠中守

高井飛騨守

小野佐清守

明樂大隅守

平多大膳

春代平多八左衛門

中田幸次

同三ツ

大所番様所用人

内膳番所用人

大坂所船子

伊豆所船子

高井主水

土方豊前守

本多主税

左田久助

井上左衛門

源清平七郎

立花丹平

榎川庄三郎

落合長門守

三宅隆政守

伊豆

太田運八郎

太田若菜

高井對馬守

窪田主水

新村若菜

石川興次郎

西丸沙兵衛

西丸沙兵衛三傳上ノ令仕沙用途ニ古出候存

ト

右於其等ノ間掃部以老中御若守列在後後中御  
御本丸西丸若年若中侍丸

同月五日

沙兵衛

伊丹三郎若菜

服部中

永井求馬

川勝舍人

曾我又左衛門

横山土佐守

松平伊勢守

村上信濃守

古郡孫若菜

時辰三ツ

浅野金三郎

市橋内膳

同部主税

山岡十左衛門

同部

少書院考

向井六左衛門

大之保紀伊守組与次

久貝又三郎

西丸守小佐組

小笠原金十郎

左大臣出羽守組与次

本多日守組与次

安藤八郎左衛門

吉山守藤守組与次

间宮左五郎

岡橋守守組与次

松崎藤十郎

右大臣將攝少佐組

内井肥前守組与次

田色十左衛門

武田和泉守組与次

坂坊左五郎

駿府御番組与次

大橋平左衛門

西丸守裏門考

秋山旗左衛門

少佐

朝比奈次左衛門

大之保兵右衛門

西九沙堤改

石川吉郎左馬

古原帶刀

山中又三左

牧 志摩当

内中庵之助

井岡總助

内山七左衛

庄田五助

川路三左馬

中野又三左

西九沙堤改

二九沙堤改

沙堤改

沙堤改

西国郡代

村田我三郎

根知善左馬

寺西藏之

西九沙堤改 舟上之倉仕沙堤用途 古出船外舟上之

右於沙堤管船金銀類掃劫以老中御者等俵中列危俵後等  
中殿 御中九西九 右大将様美年奉中侍危

京都沙堤官

小堀主税

大津沙堤官

石原清左馬

沙堤官

山本大膳

川崎平右馬

同三ツ

宮内省教書以用人

紅林勘解由

同市用人

泉本三助

民部省教書以用人

喜本新左衛門

同市用人

山中左衛門

右近衛教書以用人

朝比奈忠臣

長柄左衛門

同制分三ツ

右近衛掃部次老中列在回人中

奥平左衛門

大澤孫三郎

同制分三ツ

田中休藏

奥平左衛門

成島邦之丞

同制分三ツ

右近衛相麻

同月六日

伊書院書

之員因幡守組

蜂谷左門

小笠原長吉組

神谷八右衛門

伊中組

佐々木三助

土佐伊豆守組

如卷伊豆守組

服部五左衛門

追卷之守組

大河内合之丞

時辰三ツ



十八人

中多左京

金田帶刀

二九

中川忠太郎

山角市左馬

大井帶刀

西九

右於河右京初登縁頼掃部以老中列九位後當巾御之為年景  
中侍丸

卷合

渦島内通

大園兵庫

松平勘助

忌堀田彈正

酒井新三郎

秋月金次郎

松平邦之助

北條左衛門

蔭田隆統

同封

久世三四郎

小出主水

宮城大膳

佐藤令色

片桐帯刀

勝田左京

安藤祐次郎

土岐大學次

大園土佐守

津津浦左馬

宮城平四郎

船橋島左馬

目

同部

同部

神保三子次郎

目

同三

高力健三郎

同五

同部 舟又丸上合仕 沙用 途 手 杖 威 小 舟 手 下

同 古庫 祖 又 隠居

高谷山城守

名代 高力 右 近

同 大 藏 又

滝川 安 藏 守

名代 滝川 織 守 郎

山 邊 者

同 土 佐 守 又

横山 内 通

名代 横山 之 敬

岩合 為次郎文

同

近藤頼母

名代石川興次郎

同三ツ

所書院表

西井隆政 助次郎文

同

石川 主水

名代石川助次郎

岩合

為次郎 文

長谷川 三藏

名代長谷川為次郎

同制 舟上 全江 沙 周 途 心 在 成 外 舟 上 心

右 於 菊 之 間 掃 部 政 老 年 列 凡 同 人 中 原 一 志 年 當 中

侍 左

同月七日。

又 所 書

松 越 路 右 進 次 郎

石川 次郎 左 郎

幸 山 内 記

小 室 尔 美 權 右 進 次 郎

飯 田 進 左 郎

左 田 集 入 道 次 郎

横 山 伊 左 郎

所 原 次 郎

香 井 市 十 郎

長 崎 孫 左 郎

中 奥 沙 藏

朝 倉 賢 次 郎

武 田 興 左 郎

目 向 七 郎

伊中組

土屋作左衛門組

加藤伊左衛門組

杉浦大膳

小栗又一

服部久左衛門

無津左京

船見健次郎

長田理助

杉園孫四郎

杉平又十郎

田中唯一

伊友内親次組

池友右左衛門組

洞宮徳五郎

常治左衛門

向坂清之助

清野助左衛門

堀... 經五郎

大久保興三郎

西丸中佐組

中多目向吉組

石田七郎

小出権之助

岡部庄左衛門

川田六三郎

志山安藤守組

冨永孫六郎

松田善右衛門

建部傳内

保一監物

石田寛十郎

岡橋二左衛門

宮崎次郎重

伊書院者

永井兵次郎

時服二ツ

大久保紀行守組

長谷川廣五郎

大津玄三郎

早川十右衛門

諏訪庄助

柘植三藏

朽木周防守組

坂部三十郎

石田外記

小笠原甚四郎組

京極兵部

定内伴織

神保織部

石川助次郎

伊丹源次郎組

言升但言組

松平左九郎

評内帶刀

西丸市書院著

稻葉大悟

著活押安書組

間宮内藏介

松前三郎左衛門

淺野忠信書組

芳根内通

青木新五郎

川勝又左衛門

秋田法政書組

田沼主水

土方半三郎

伊藤智吉郎

富永孫次郎

三枝貞五郎

石川大隅守組

朝比奈六左衛門

右大将様御書院著

土方廣吉郎

本多對三書組

岡田右近

嵯河御書組

太田主税

碓氷御書組

各代坂本三郎

小栗左左衛門

右代左川助左郎

諏訪初謙太郎

村垣左左衛門

沙多郎

西番松沙左衛門

西丸沙多郎 月上月金仕沙用途 在藏公府

三ノ

沙多郎

杉浦出雲守組

小出大助

右大将権沙多郎

酒井肥前守組

筒井赤松

同三ノ

沙多郎

三井組

本多英吉郎

同前又上月金仕

右代左初金縁頼掃部左中 伯耆守佐中列

佐後守中 三ノ 右様 若年寄中 侍

同月八日

沙多郎

右内左衛門組

可児孫十郎

五士元沙多郎

大岡孫右衛門

大坂沙多郎

水内洗輝吉郎

同破換奉行

神原太郎左衛門

右大将様御用

村松万蔵

大沙巻

金田鞆負

船越渡り御用

小幡監物

善匠織物御用

多野屋久吉

沙代皮

平岡文次郎

喜山九八郎

大原左近

南倉為次郎

時辰二ツ

淀川五書如文記

二條沙巻奉行格

中井園次郎

糸巻御用

馬場為次郎

沙令奉行

江邊小市吉馬

沙巻奉行

武崎為吉馬

沙巻奉行

久志本左衛門

善匠御用

伊丹次郎吉馬

官御用旗奉行

織田金左衛門

目付控頭

河内仁三郎

月内中合頭

飯田庫三郎

民御用御用奉行  
用人員男



西丸山宮傳付上令江所風運（在成小舟）

右於所宮初至塚類掃部次者本傳中名列在傳後中  
後（若年易中）中多豊後守堀田掃部守侍從

小善信組

左塚極茶吉組

辻 久五郎

都筑海之助

大津吉道

神保鈴吉郎

佐野守吉郎

目録

長村丹後守

大崎甲斐守

目録

目三

長村丹後守

森川雄之助

目二

酒井守

久世齊吉郎

大崎甲斐守

松平吉道

目一

堀田左衛門

久留十左衛門

堀内左衛門

岸本辰之助

目録 又片上令江所風運（在成小舟）

子人氏

志村又右衛門

石坂桓吉郎

萩原清吉郎

萩原順吉郎

同或

中村又市郎

窪田鉄三郎

原中左衛門

河野信之丞

窪田助一郎

山本橋之助

同或 右ノ上ノ令は沙用通に在るに存する

右ノ鄒陽同同人の中

○世ニ名高キ祐天僧正ト聞フニハ地藏菩薩ノ權者ナリシハ  
尾善筑在世ノ中示ス。板行ノ小冊ナリ。又東照宮様ハ三州某寺  
ノ神像。寅大将ノ御化身ナリシハ。世專ラ傳ヘ奉リテ同ク相似タ  
ハ。今神君ノ御タニ茲ニ述寫ス。思フニ小冊ハ筑カ所筆ナラン。

武州目黒祐天寺開山大僧正本地身地藏大菩薩略縁起

抑當山開山大僧正在世より滅後の今又重々利益在生の廣大  
無色なる事一代の行状記と作り教書も出世上一回兄聞する如  
りて實よ書法有縁の大師師より直う好仰て本地と尋せ釋迦  
如来より滅後れ在生を救共樂を成き附屬をうけ六道よ遊  
戯常在に能化遊度一臨地藏大菩薩より謹々縁を證問

するは信濃岡本城に光明院を設置するは惠心僧都の真作  
地藏大菩薩あり

のりけ二尺寸余余たのり豆を蓮座より踏まげ居る是六三  
六道の元生若し沈み居るとあらず速いと重祓て苦う若  
よ入と居あらず是より思ひす常と成るは元より靈験無双ありて也

此男女多く利益を蒙る也志あるは寛永十四年四月八日の朝

巨僧例此廻り修法供養をけるは本言まきまきすて蓮座

と後光のてけりあり

後と念考するは今日僧正初ら母胎と神識と入投と終る  
日也十時より奇蹟多きるは僧正は詳あるは茲より畧す

佛と一画像とを立よけ並て帝坊の坐よ添せし享保三戊

年七月十五日 寛永十四年より八十二年也  
僧正今日非滅は滅家と現 滅す水野出羽守忠周朝臣乃

夢よとけるは異僧来り告けるは我々苗而光明院の地藏也八十

年来元生佛部のた光假の世間よ應現せしれど生方の化縁すを

盡たれば雲よ隠る月のみ利益を滅後よ譲りゆり来きり

世間よ示現のものと八廿年来帰依するもの祐天是也と日别念誦の

作法を教示し今より我を念すべしと有るは熟眠の夢と覚朝

臣奇異の思ひをなす早朝使者をきり見せしはは僧正と

と名せず依る使者 菅与赤と云  
僧官と云 共に封と解康と関くは嚴然と

して言像まきける 本像の修母の胎よのと云るのちさあたり只元生  
足波結縁のよめよ示し居るはあたり風来寺寅大

使者立来りて由と述程あり祐海上人より僧正

遷化のる告来りて朝臣よ驚信し其滅をなげきせ本

地と名び のりる靈像我依りたまはすするを  
法家申より物許よりこまきとあり 光明院より地藏菩薩

願中よ請符 朝礼暮念供養せしむ世法委く自覚よて悟海  
六人の告賜くる け書今よあ  
山竹書とす 朝臣卒去の後地藏菩薩を光明院よ返し

きする是より其像利益と名請の老か施興し 意地の男女少  
情へく群衆いく千万といふ事と志次利益と蒙る者の中も

近郷の農人田畑へ出るの時稚子ある者ハ朝乳ふこと念ませ  
地藏堂へ建行あつけなると名並けまば子供等いたうひまた

まぶれあそび夕方まも母も志くことす怪我もせざれば  
子より地藏とも子そぶて地藏とも異名す。又よとさき無

とい父母世堂へ来りぬ存公よ名上とせしまよりおまよ成  
長す。光明院へ返く酒盆あり或時より夜毎よ小僧一人酒を

買求めよ来りしつ方の者ともとうらぶりしや或夕

跡と見送りけるよ光明院の境内よ入てこそ跡見んがればわ  
る小僧のあるよやと尋らよとある者あしと云うぞ相違白

密よ賽談よ志るしと甘納めけるよ相違志るしある談を  
持来りしつは是より地藏菩薩の結縁利益のつよや又ハ遊

戯をへ後るよやと独り考らよ酒ハ一呑れ中よあると名  
指の酒酒好あるよの事りて又酒酒をゆめげよまたべれと云な

うら笑ひ呑その有しとぞ是よりおし造酒を倣ければ再び  
あふりしつとあひ倣て立飲の者ハ必ず造酒を倣けるや造

酒地藏菩薩とも名く。江左海川中誓言の位持を以て悟正の

法縁成 亦恒職の中四度の執務より以て再建の樹を失ひて  
せんと僧正の病床よりの此由をあげきりて僧正微笑し  
再建せよと名号一幅を授けらるるを後恒持感得乃  
幸ありて僧正此の聖旨より境内の石地藏等へ江戸中  
群衆を是を縁として再建目めりて成就すを後右  
の名号を今地所管の茶石の観音の後より左文字に彫付  
諸人の写すまたよりめりしむ是又開山の本地を説す也

○此の本地聖迹の利益多しといふを略茲

寛文九巳年四月十日信濃國松本の住人倉本七郎左衛門なる  
者為山よりの本地の靈蹟をかくり聖跡の利益如信一説  
又香

想の告ありし  
想の告ありし  
本地聖跡同の如くはは北益いふといひ城

僧と談話を定先帰園の後光明院よりはうり城之松平丹  
波守殿の許容をうけ南山よ遷座ありて別堂を建て利益光  
生の廣大なる事を欲す九諸佛菩薩の衆生を濟す後  
幸に利ありまざるといふ其因位の發願かのり利益より  
有縁の利益いとわづらるる多し中にも地藏を大慈  
大悲深重なりと禮ふかめ三界六道の衆生を平等に  
よ救ひ後入り且此等の惠心先徳慈悲光明の利益心より彫  
刻せしき靈像あれば未代教化の分也故に僧都の功  
業世傳に遺合ありければ奇特と應生し示さるる者

されハ一宮禮部念信の男女ハ大僧正垂跡の言徳大菩薩也  
地の誓願一同ニ加持一福智圓滿家内安全種子孫繁昌  
心願成就の利益を蒙らん事疑おぬう。以何況や地藏尊ハ  
三尊来迎の常誓も形相を現し且秘密の經典よハ何  
陀佛の因位とありこれ終りぬハ地蔵尊の種子字飛の種子字と因  
果一同と標題すとあるハ因と果よ譲らハ大僧正ハ阿訶陀佛  
のち垂跡と仰らん証べう。されハ現世の利益いよく得  
たのちあれハ哀愍の光明まあり。採取の本領と仰くぬき者  
あり

○両端ノイヲ追記スルハ近頃御葬送ノ年屋鋪ノ門前等モ幕  
ヲ張り隔ヲ為セシト其後町家ノ婦来レルニ値テ問タレバニヤク市坊モ御  
葬行ノ筋ハ其町々ニモ皆店前ニ幕ヲ張りタルト又三日前ヨリ其  
屋主ノ外ハ婦女小兒等ハ悉ク親類ノ方へ遣ハ一人モ居ルヲ能ハズ  
御通行ナキ町々モ近キ所ハ是ニ應メ嚴シカリシト

又京ノ知恩寺増上住職ノイ其後或僧ノ云シハ彼寺ハ引込紫衣ト  
呼テ紫衣ナレド爰ニ住スレバ他ノ昇進ハ協ハズ一世ノ終リナル也然ル  
カス有シ何カ官上ニ子細アルヲハ勿論全体年臘ヲ論ズレバ縁進ノ  
順丁度此人ナルベキヲ一端引込復揚山スルヲ誠ニ天數ナリケリ年  
齡ハ未ダ年頃四五ナリ先達テ隱居ノ大僧正ハ古稀餘ナリト云

○前ニ増上寺暴涼ノ年台廟ノ御具足ヲ出サレ其御鏡ニ鏡

丸ノ痕所々有ルイヲ云フ。予 台廟ノ御戰場ニテ。斯ク銃ヲ蒙リ  
給ヒシ一無キヲ疑フ。然ルニ後。軍講者宗耕ニ值フ。因テ此一ヲ語  
ル。耕曰。不審尤ニ候。ソレハ関原御合戦ノキ。小山御陣ニテ。台廟  
御物見ト通リ給フヲ。真田山上ヨリ銃ヲ連子放タルキノ一也。コ  
ノ時御側ノ衆ニ。討死ノ人而三輩モ有シト。予聞テ歎息恐入リ。  
是等天山ガ傳ヘシ所ノ道器一致ノ旨ニ協ヘリ。

○總メ刑人ノ并。獄司ノ用ユル所ノ鎗ハ。柄朱黒ノ段塗ナリ。予モ引廻  
シ曝者ノ并ニハ。行カハリテ度々見タリ。是モ宗耕ガ云シハ。磔罪ノ  
并モ。斯鎗ニテ刺トサテ斯鎗ノ始メハ。福嶋左衛門ガ家ノ數鎗ナ  
リシヲ。故有テ某ガ物ト成リソレヨリ。獄司ニ轉スト。其次第八聞シ

ガ忘レタリ。福嶋ハ違ハズ。

○予ガ廐ノ仲間ニ金子氏ノ者アリ。予ガ馬ノ口附メ。屢々途話モ  
及ベリ。斯男ノ祖ハ。法印公ノ并。朝鮮ノ軍ニモ從ヒ往シ者ナリ。此者ハ  
戰場ニ從テ。毎ニ御馬ニ添ヒ立テリ。已ニ戰ニ臨ンデ。公御馬ヲ馳セ給  
ハント爲ラレ、ニ御轡ヲ執テ放サズ。公恚リ。離セトノ給ヘ。離サズ  
未ト云テ動カズ。公増々怒リ。御轡ヲ以テ頭ヲ撃タルサレ。此  
曾テ免サズ。然ルニ其機至ルヲ見レバ。今ト叫ンデ御馬ヲ放ツ。公即馳  
テ敵ヲ突キ。逆勝ヲ得給フ。又是ニモ限ラズ。先陣ノ戰。公ノ意ニ協ハ  
カ。ハ。嗚鳴ト高声シ。御幣ノ柄ヲ咬給フイ度々ナリシト。因テ御幣ノ  
柄ハ竹ナリシガ。御齒ノ痕殊ニ多ク著テ有シト云。今其物ハ傳ヘズ。恨ム

ハシ

又コノ金子鮮陣ニ在テ公夜ニ入レバ毎ニ屯營ヲ巡リ給フコノ金子  
 毎ニ御馬ニ隨フ公自ラ松明ヲ持テ御馬ヲ進メラル時移ルニ順テ松  
 明ノ燃サキ闇シ其片ハ毎ニ金子ガ頭ヲ以テ燃サキヲ撲拂ヒ光ヲ出  
 サル斯ノ若キニ因テ金子ガ首ハ火ノ爲ニカタマリテ殆ド焦土ノ如カリシ  
 ト主従ノ勇剛想スルベシ

右ノイモシ或日宗耕ニ語タレバサレバトヨ 神祖ニモ御奉ヲ以テ御  
 鞍ノ前輪ヲ敲給フイ御瘳ニテ御先手又ハ諸軍ノ中御意ノ如  
 ナラザル牛ハ高声ニ御指揮有テ御奉ヲ以テ御鞍ヲ擬給フソレ  
 故ニ御手指ノ節コレガ爲ニ塊ノ如ク後ハ御指ノ曲節難キニ至リ

ト又薨逝ノ御時ハ夫ユエ御病ユエカ御指伸テ屈サリシト云

○世ニ様々ナルイ有リ過シ西城尖上ノ後予ガ莊ノ近ク辨天  
 小路ト云所ノ旗下人某川柳句ヲ口占ム

鯨ヲ灼テ親父カ味噌ツツケ

鯨ハ子ノ城ナリ人竊ニコレヲ傳テ漸世ニ聞フ人以テ唱誦ス又  
 斯口占シ人ハ性愚ニ常ニ文才ノ聞ヘナシ然ルニカル秀ウ吐シハ  
 奈ヅ逆人又コレヲ訝賞ス是ハ善ケレト此イ天上ニ響ケルカ其頭  
 ヨリ内意有テ小普請入りノ上居宅召揚ニナリ今ハカノ辨天ノ宅ハ  
 餘人松前氏ノ宅トナレリ右ノ川柳句ハ川流ノ淵瀬ナリ鳧  
 コレハ別イナレド又柳ノ一句



始メ小六<sup>コッ</sup>後ハ御大祿<sup>タイコク</sup>

盖阿波彦蜂須賀氏ヲ謂也。

○前ニ記セル縁山知行所代官奥村某ガ著書目ヲ舉シ後其書体ヲ標鈔セシヲ得タリ茲ニ抄テ姑ク全覽ニ易フ。

城山奥村先生著

懷中便利折本帙入

量地弧度算書

上下二卷

附録一卷

此書ハ先生西洋測天の法小本づき多年量地の術を研究し  
其樞要たる八線の捷徑表を作り羅針盤全周三百六十分  
割を本方と一全周一百二十分割を略方と一と分間測町見術  
用との算法と初学小舎一易きや一小悉く圖解を以て上下

二卷小本は誠曉一附録もと量地術の大意を説量器および水  
繩向竿等の製法を辨し後小圖を設て分間測町數量り方見盤  
見巻一の仕方燈塔の記一の繪圖の引一歩詰の仕方繪巻の編  
方次小町見術巻邊高低淺深廣狭の測り一等の詳し記一  
たるものあり尋常分間測町見術の類小町見術量地算書  
及び軍学炮術家元右よ欠まじ記要書なり

天保丁酉孟春

東壁堂主人誌

考定新製

一名船中日晷

海上測器

經緯儀

附経緯儀用法圖説上下二卷

藏梓

右緯儀は西洋人船中にて用ゐる所の羅針盤改模して  
 出れ予が嘗て見たり製法は太陽の如く恒星を測る器  
 ありて悉く黄銅として造り盤底は鉛板に充て水平を  
 轉旋自在にして傾款の患なきやうにしてたるものなれば  
 船動くといへども測量不妨げありて簡易便利の測器之  
 類又二巻の冊子の緯儀の図解用法を詳し誌し清敬  
 氣差の表地平視差の表距等圈の緯度里数の表等と添  
 されを挙げ南書城の星等と云へたる星図及距星赤道  
 緯度表其の二十八宿赤道緯度の表と載せ第一は我邦の船  
 人にも出来易き捷法は太陽緯度表城よりて其用以

方との精く書著し二巻とありて蔵書也由へは船中右の  
 測器を用ふる時を陰雨闇夜といへば方位を失はば又颯風  
 よ過て地方も是れぬ洋中お漂ふとも緯度表よ合を測り  
 見らば瞭然と本邦の方角を知りて帰帆をさるる疑  
 なき陸地よははた更測量等よあれを用ひて甚皆便也  
 延宝の人々右の器よ冊子を添て控共を愈し

天保九年戊戌初冬

東都西之保

城山奥村志三郎増地誌

經緯儀全圖

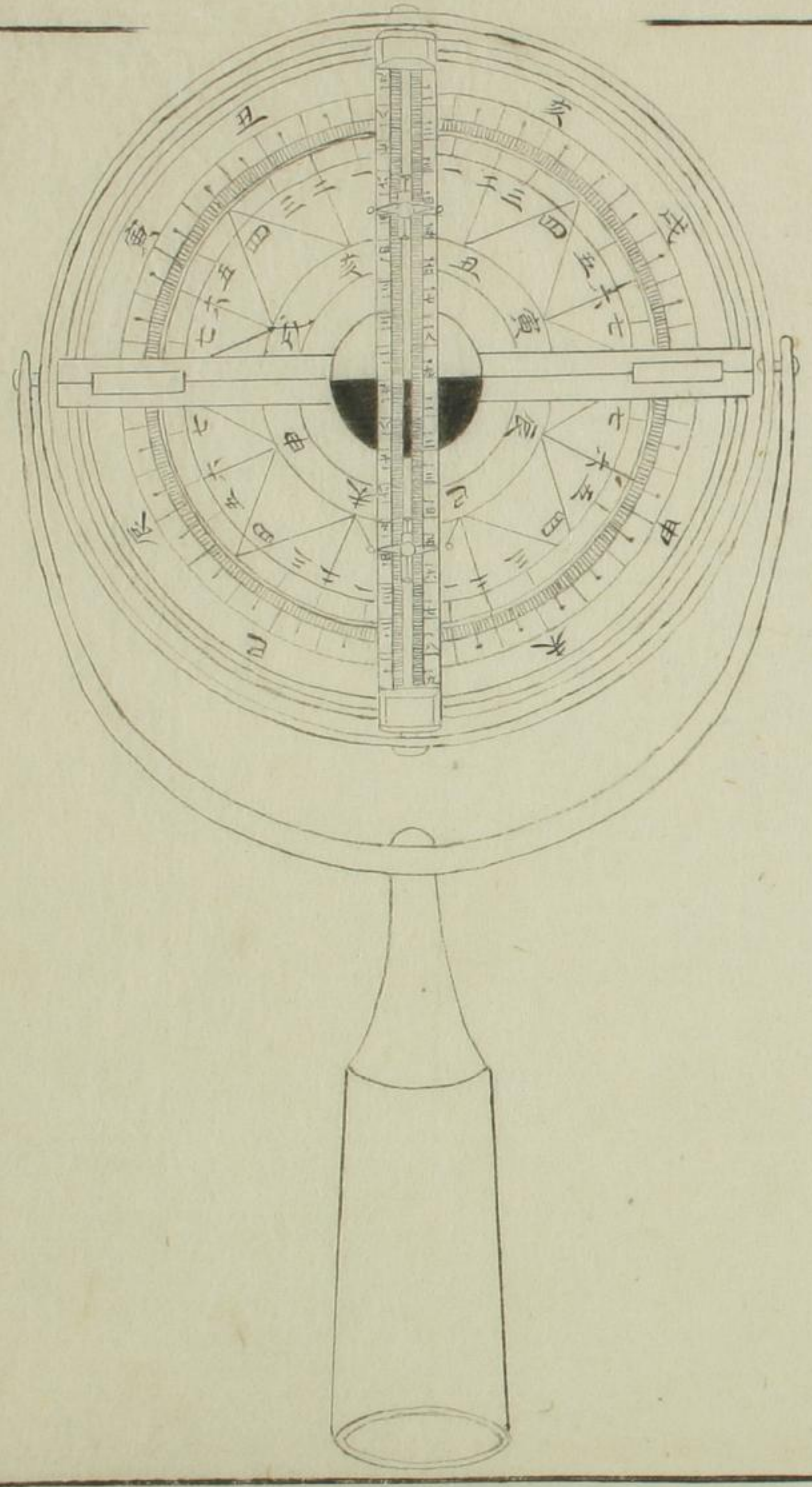
一名船中日晷



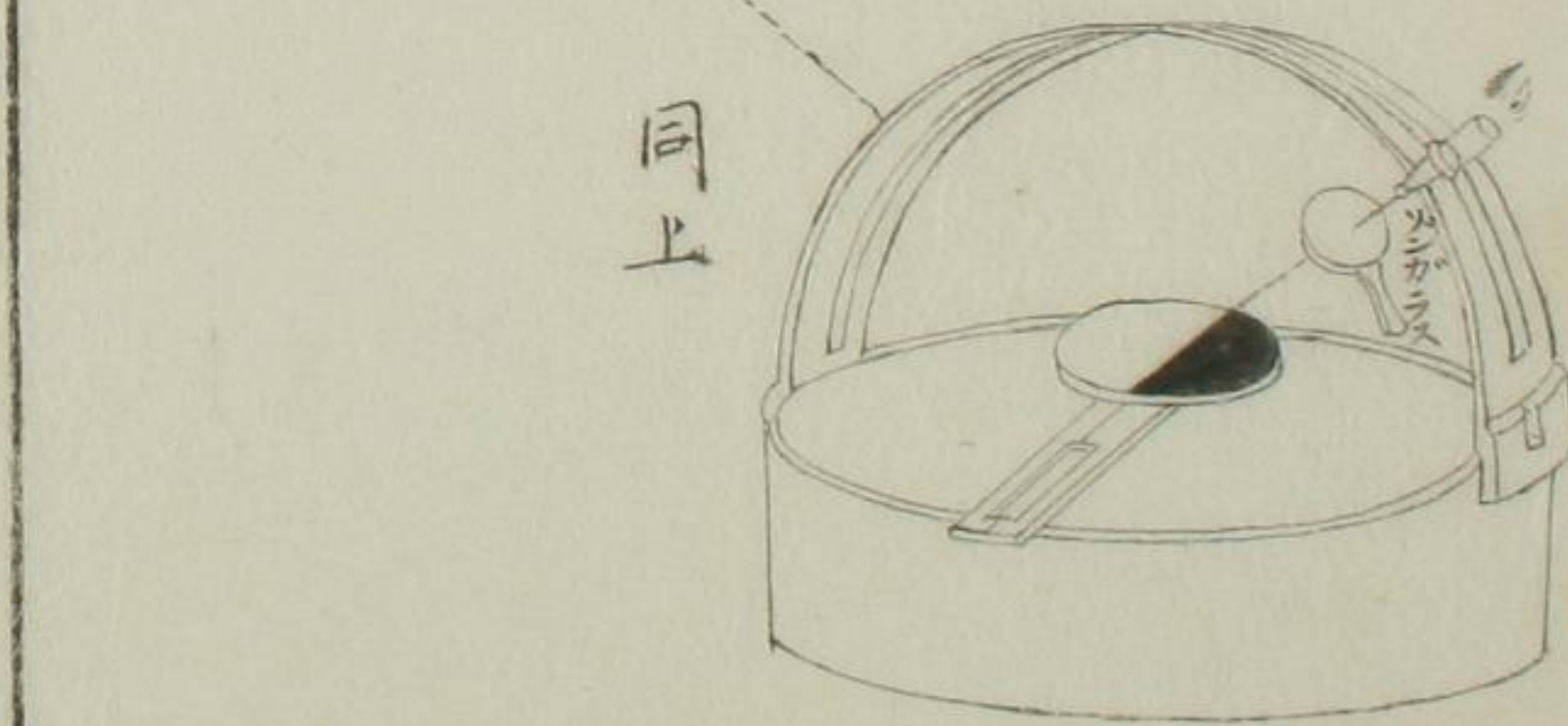
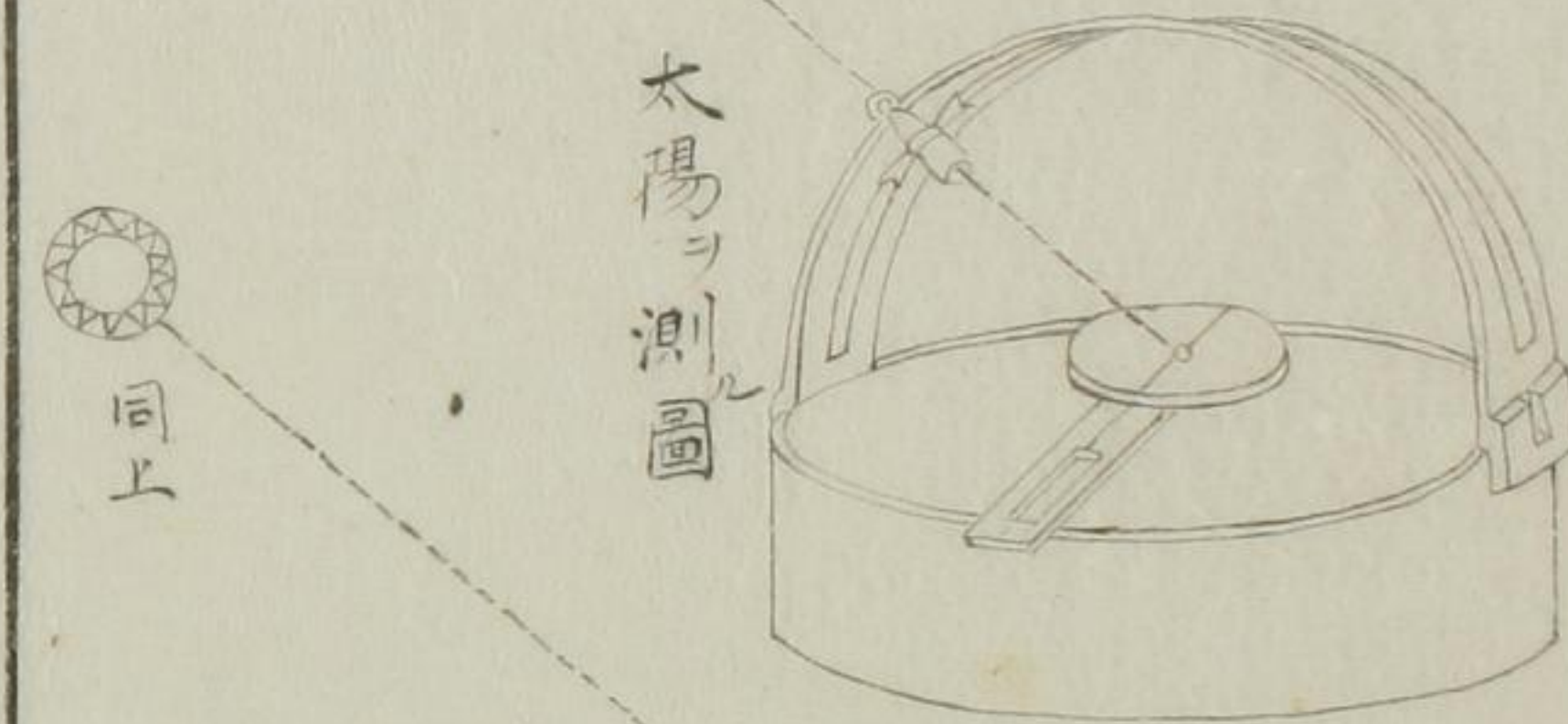
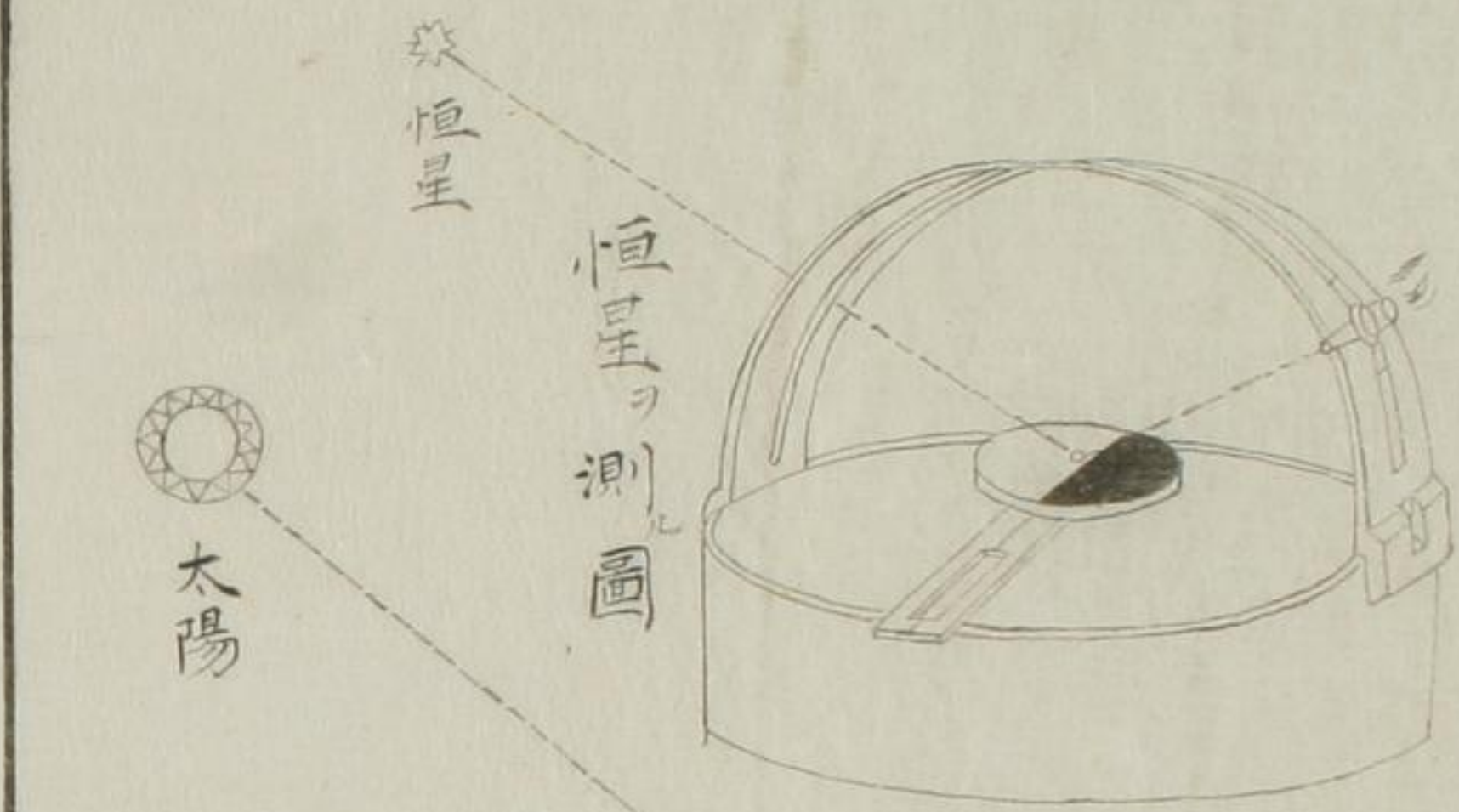
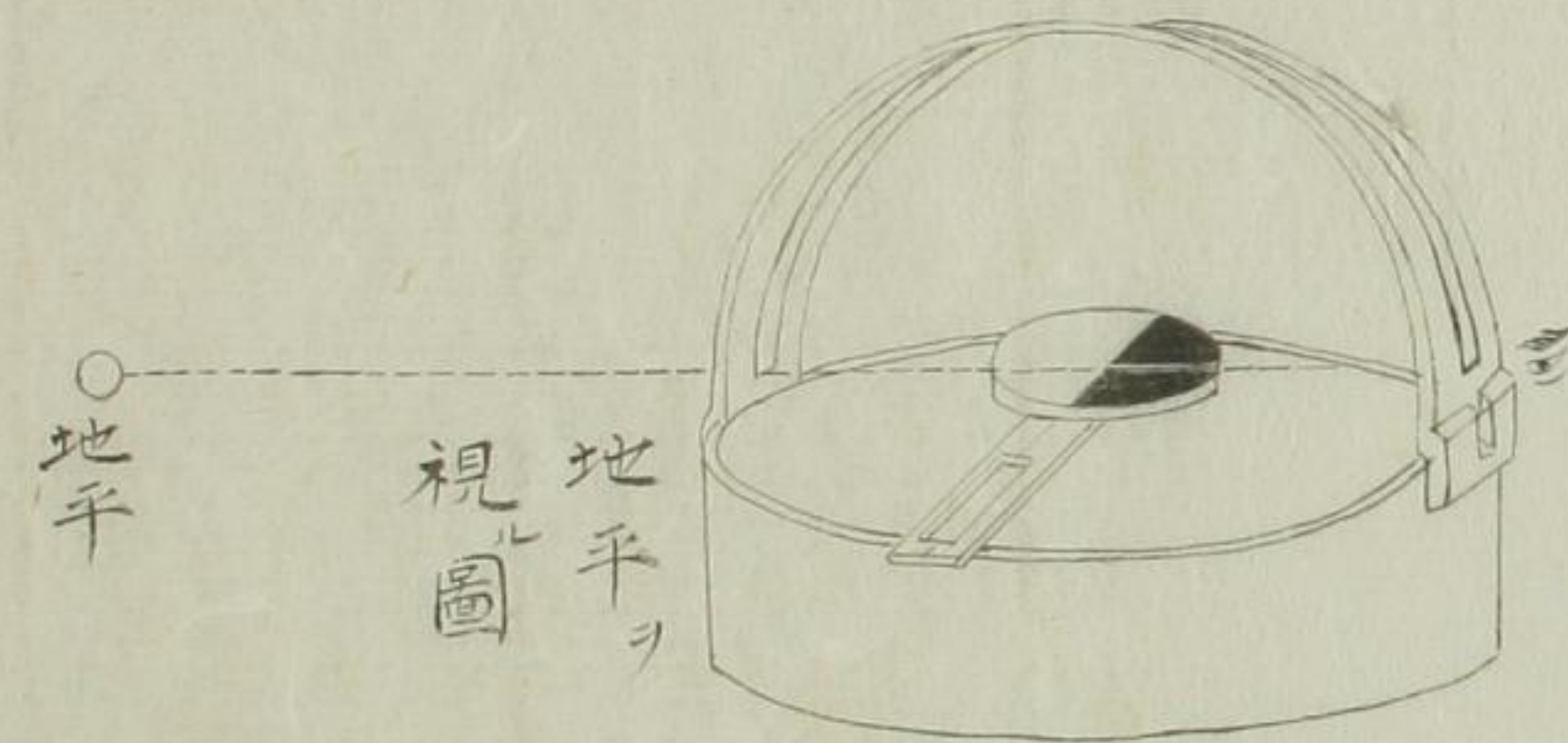
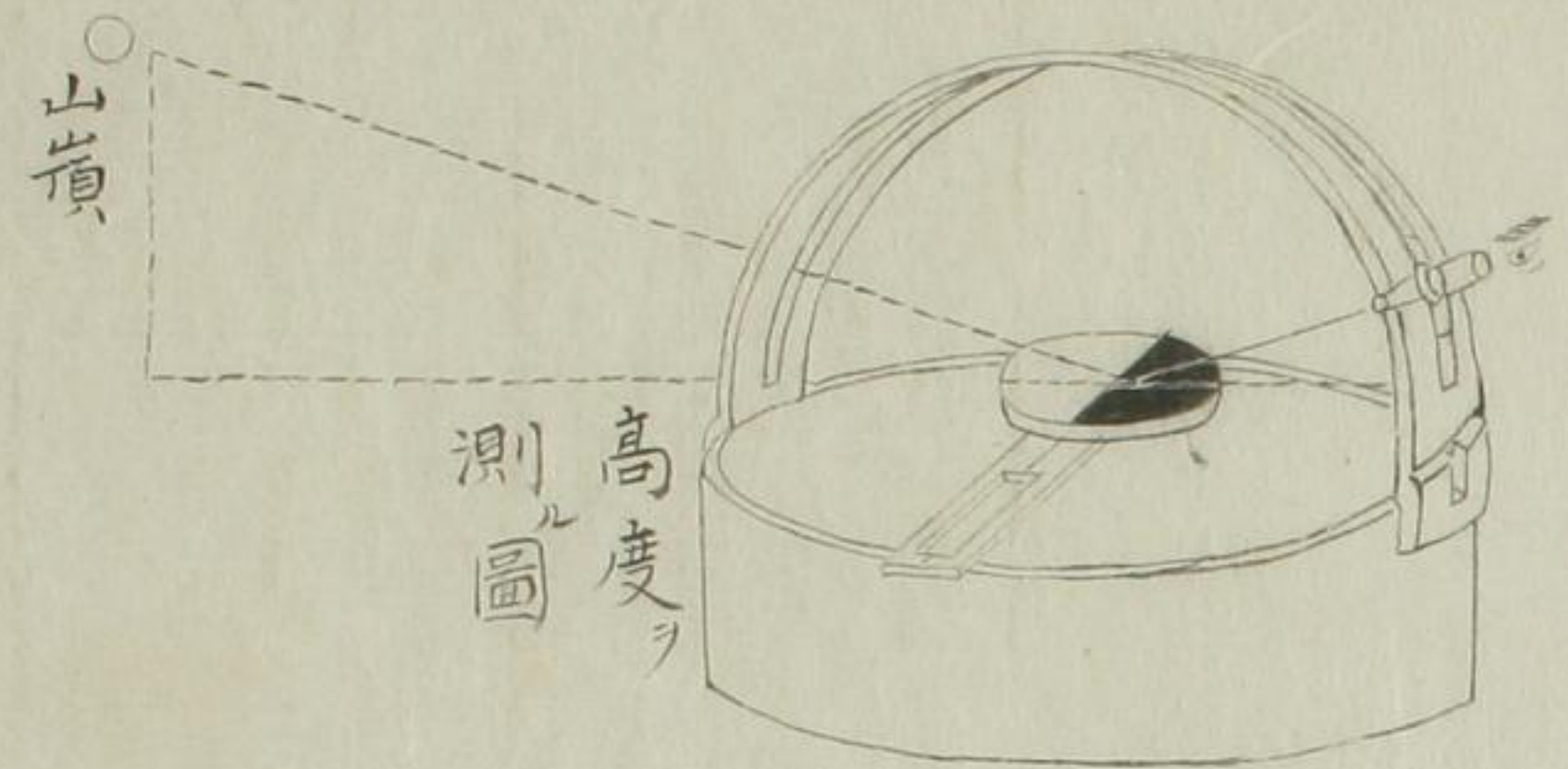
總高壹尺五寸

是ハ試メ割テ  
尤百歩ノミテ再訂  
の測器は如ク  
其形と異ヨ  
盤の徑七寸ニ

正面



之圖



緯儀用法圖說卷之上

此の緯儀は西洋人船中にて用ゆる羅針盤を模して出来  
 小予が新考成加製造しつる測器なり悉く黄銅を以て  
 造り若小示光圖の如く盤の中心より黄銅の柱を植て  
 針の針を文針を柱上より立て平準浮動し針の背より三  
 十二方位を畫き色どりたる厚紙を糊して方位を括さしめ  
 外層より三百六十度を畫し其周圍より十二支を逆旋し配南  
 して小きを鑄り其上より玻璃板一枚一面より張りあはせ  
 内環の上より仰角の度板  
 度板若後の中程を刻りて其隙より三十二方  
 位の直線をえらふ此度板を以て其安んずる  
 を魚し其中央より小圓鏡  
 此鏡は面を照し其面を照さざるやうに漆を塗  
 忠を地平界として太陽より星を移し測るべし

鏡乃裏より白くぬりて中心より  
 一線ととく畫し日晷をなすべし

と云し鏡面を以て地平とし盤の南北

西より立てし門より子午線の半輪を夾み螺旋を以て固め中央の鏡

と平準より子午線の地平を定め北の地平界より南の地平界まで

の間圓の中道を刻りて二つの小管  
一は日晷管と名づく管長く孔微よ  
 して太陽を測るよ用ひ恒よて頂より

水の圓より遠く一は日晷管と名づく管短く  
 孔大よりて星を測るよ用ひ恒よて頂より南の圓より

両色より管より八十度を畫し天頂を窪りより南北より象限九

十度の数字を傍に記しておれを鑄り盤の両年の下に小孔あ

りて螺軸を設けしきを横より外環の二孔へ繋ぎ外環を

おしおれと十字より對する二孔より螺軸を設けしきを其形板手

の如く作り柄の両端よりある二孔へ繋ぎし柄を裡と虚は

て其臺の中央三柱より運旋して測るなり其盤底に銘を  
入れ水よりて水平とす一旋轉自立して傾歎の患なき  
中其製法たる器あり

廻船寶富久留

折本一冊

此書ハ海船颯風小遇ハ大洋へ吹流され此方の目的地とすかハ  
本國の方角わうとん、いんとも為愈きやうなき時忽ち其方角  
誤して帰航をさると報ひなき古今未嘗有の一此を以て舟  
人懐ふべき錦囊の冊子なり

天保己亥四月

東都西之堀城山

温和堂藏梓

○三月十五日ノ沙汰書ニ松平和泉守ヲ召サレ御座之間ニテ  
御目見アリテ。

父和泉守重幸御政ヲ成ルル所ニ仕置等々あるん  
ほゆ極々作也。

或人問帝鑑衆斯ク御座ノ間ニ於テ拜謁ノイ何カヤ答是ニテ  
老中ノ子息父京都往<sup>テ</sup>ナドノ牛召出サレ上意ノイモ有リサレバ  
没後逆斯ク有ベキハ不審ノ員<sup>カス</sup>ニハ有ベカラス又或人ノ云シハ前ニモ  
粗云シ如ク間侯ハ特進遠方ヨリ御郭内ハ入ラレ織侯ハ不首尾  
ニテ浅草ヨリ三田ニ遷ラレ因テ泉州ハ久シク住馴シ御郭内ヲ出  
テ浅草ノ邸ニ赴クコノ浅草ノ邸ト云ハ織侯ノ祖父山州ト云シガ

四位望等ニテ貧迫トナリ。屋所ヨリ臣舎ニテ弊損ノ体ニテ有シ  
 ガ間度ノ三田ノ邸ヨリハコノ浅草ヲ當泉望ニテ往タリシガ到レバ如  
 斯キユエ又々官權ニ手寄テ内意ヲ歎タル。官上ニ聞フヘタリ  
 杯風説セシガ予ガ惟ヘラク。此度ノ御イハ故泉州ヲ引給ヒテ當  
 泉州御懇意ヲ蒙シハ世ニ詔フ有難迷惑ナリシイニヤ其真ハ  
 實ニ測リ知ラズ。

○左右ノ人ノ記セシヲ茲ニ移ス。近頃ノ事ニテ何國ノ者カ知レズニ  
 人連レニテ江戸ヘトテ板橋邊迄來ル。二人病テ歩行イ能ク因テ  
 連ノ者駕ヲ頼ミ病人ヲ乗セ駕舁ニカタル我等ハ神田須田町ニ  
 往ク者ナリ。賃ハ江戸ニテ渡スベシト約ス。因テ途中ニテ駕舁酒

代ヲ乞フ連ノ男云フ。今懷中無シ何トゾ借シ呉レヨ。程ナク江戸ニテ  
 一同拂フシト駕舁モ心得自ラ飲食ス。然ルニ柳原ニ到ル頃二人  
 ノ男用事有リ迎去ル。駕舁モ待モ來ラズ。駕舁怒リ病人ヲ責ム。病  
 夫答フカノ男ハ途連ノミニテ一向子細ハ知ラズト。駕舁モ為方ナク病人  
 ノ衣ヲ剥菰ヲ着セテ去タリ。流石ノカタリ者ノ駕舁モ返テ其上ノ  
 カタリニ遭タリトゾ。

○日成録ノ補遺モ度重リタルガ尚モ絶ガル。芽出多喜御事也  
 右御三家以下ノ家頼ニテ御恩施アリ。下ニ述ブ。

三月十九日。

堀石牧  
 相磯光  
 尾張家光  
 成頼  
 隼人  
 正



時辰十六

尾崎山城守

西九所丸大羽向沙普佐所開新加骨之

右於芙蓉間掃初以老中列在佐後守中

同家系家元

山澄淡路守

同而枚  
同十 羽織元

高橋 月書

中西甚五之守

用人

林 子左衛門

部定在列

遠水繁之守

丹羽十郎左衛門

松村新之守

同五拾枚  
同七 羽織元

和子外

森 兵之守

為書次

長尾口郎左衛門

佐山新八郎

綿織在列

山田甚五之守

市城附

磯野半左衛門

本号材木在列

日比野源八

為書次

尾崎又六

綿織在列

水谷惣八郎

本号材木在列

同  
同六 羽織元

綿織在列

織田大助

同格

劫定吟味方次

浅野嘉六郎

小川六右衛門

古筆組以格

横田輝三郎

後書

織田錦右衛門

川並重行

本牧為三郎

白鳥村生重行

服部在八郎

同  
同五  
羽織元

浅色万右衛門

古筆格後書

平岩元次郎

築地屋吉右衛門

恩田沢九郎

佐佐代安

山田彦助

小牧代安

水野篤助

太田代安

河原一太郎

船多代安

浅色源七郎

劫定吟味後

市瀬末七郎

同三十枚  
同日  
羽織元

山田彦三郎

东城寺重行

西村源八郎

船多

野垣源三郎

武蔵若平

同新舟トナリ

西田 東亮

伊庭 壯八  
伊庭 吉六  
西田 東亮

同百枚 羽織

水戸 教家  
家老 尚時 徳右

中村 清閑 伴

同五十枚 羽織

若年 奉  
城代 友

左田 銀次郎  
武田 左九郎

少将 格

同 羽織

所 城 附

種 幼 年 左 衛 門

同新舟上之會ニ依テ振替舟トナリ

右八間ノ戌年三月十六日尾張殿へ西九御普請ニ就御座所向

天保九

并大奥向ニ御手傳仰出サレ御手傳ノ金數ハ高割トカ沙汰有テ

玖萬柒阡玖陌陸什肆鐐ノ御用勤ラレニ因テ斯ク家臣ニ七拜

領物有リ又水府ニハ同シ四月廿二日ニ内願セラレシ如ク金壹萬

伍阡鐐上納命セラレ其事ニ依ル家臣尾州ト全シ其勞ハ領分

ニテ用金取立又諸家ハ度々御勘定所御金庫へ呼出モ有テ是

等ノ勞ニテ拜領物ニ及ブカト

同月廿一日。

杉平加賀守家外

浪石枚  
時版十

奥村丹後守

横山山城守

前田圖書

同石枚  
同六

前田万之助

中川八郎左衛門

石野左近

同五十枚  
同五

遠藤教馬

前田主馬

不破紋左衛門

同  
同四

中保平次

林武左衛門

山崎守清

浅色新藏

若川留五郎

西村典三男

鈴木清之丞

堀学之丞

小川友之助

永井康之助

同三十枚  
同三

腹部信苑

和由七之助

中野田十一郎

河水主水

同中野田

加茂彦三郎

尾柳孫右衛門

横山彦右衛門

服十次右衛門

荒井儀平

井伊掃部頭家

同五十七枚  
時服五

同二十枚  
同四

同三十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

稻垣郡助

西村半右衛門

河内春河

池田芥助

上田彦四郎

西郷頼母

山川玄清

竹中頼房

三宅多門

中津主膳

松平肥後守家

同五十七枚  
時服五

同二十枚  
同四

同二十枚  
同三

水跡清之朱

荒川若苑

堰者左邊

有契清之朱

志河内跡物

言須合人

宿地如之朱

境跡摸之朱

跡似海之朱

加者若苑

同十枚  
同卦 羽織元

同三十枚  
同四 羽織

同二十枚  
同三 羽織

同  
同即 羽織元

酒井雅樂次家

同十枚  
同卦 羽織元

斗者皆在焉

石本勝在焉

言瀬八左邊

志水三九郎

杉山二郎左邊

松平志三郎

言橋才補

大跡市郎左邊

関茂左邊

大山庄左邊

酒井為尉家

同三十枚  
同四 羽織  
同三 羽織

同二十枚  
同卦 羽織元

矢口 沛之清

石川 輝之清

秋保 興吉之清

菅野 又之清

秋田 七郎吉之清

糸 三左之清

志山 助介

和岡 祖吉之清

依田 恒次之清

土方 中吉之清

同十枚 羽織元

同三十枚 羽織

同二十枚 羽織元

小笠原 上原 美吉之清

同 二羽織元

二木 傳藏

宮本 源吉之清

野口 仁吉之清

西村 園吉之清

三浦 十吉之清

若田 文平

森 崇吉之清

森 崇不吉之清

宮部 一吉

中西 彦四郎

同十枚 羽織元

同五十枚 羽織

同三十枚 羽織

森 崇吉之清

同  
同三 羽織元

三輪文吉

山本祐内介

岡本八郎左衛門

小西八十射

春廣文吉

森川清三郎

星野吉之丞

岡本吉十郎

吉川 惣吉

三輪権左衛門

同  
同二十枚 羽織元

同  
同二十枚 羽織

松平敬中吉家

同  
同二十枚 羽織

井上八郎左衛門

余彦助三郎

畑越右衛門

生沼助

南野孫三郎

林権左衛門

鈴木秀保

加治敏次郎

黒田内記

本田牧吉

8

松平少将吉家

同十枚 羽織元  
同二十枚 羽織  
同三  
同二十枚 羽織



同  
月印 羽織元

菰田七郎左衛門

土方恒土左衛門

松平九十九

荒瀬一平左衛門

青山又藏

柘植八十左衛門

市原勇馬

同十枚  
羽織元

西丸所共取大契向伊勢所取御用御用御用

松平大過當家共

猪飼 央

洞水笑左衛門

銀五枚  
時服六

同三十枚  
元

碓山八郎左衛門

新納良郎左衛門

高崎合之丞

平田重之丞

押集院織初

内中如卷次

倉山依重

迎卷隆左衛門

川上松郎左衛門

格口重左衛門

同二十枚  
元

同十枚  
同計

伊集院宗直

大廻源七

有馬次郎為

中村源助

宮里八三郎

海老宗宗直

澗合仁右衛門

永田正三郎

永見十刑部

黒田彦四郎

松平三河守家康

同三十枚  
同三  
同二十枚  
同三

同二十枚  
同計

田保傳八

松崎郡平

河内卜吉為

常島玉峰

森多村逸平

大山左月馬

太田順平

赤木繁八

入谷之次

若原中宛

松平廣政守家康

同三十枚  
同四  
同二十枚  
同三

同部 元

中川宗之丞

秋内平内

右田春吉郎

栗生宗吉郎

林彦左丞

日中義左丞

小川祐宮

門倉助左丞

津澤孫三郎

永井興左丞

同十枚 元

松平大和守家茂

同三十枚

同四

同部

同部

同二十枚 元

篠原半平

竹田市郎左丞

没樂小辺司

伊豆源吉郎

津尾内通

同五十枚 元

松平土佐守家茂

西村也左丞

及右小左丞

関権平

滋高左伴次

第四世郎左丞

同三十枚 元

同二十枚 元

廣額

坪内

小坂

多崎

園 全七

有吉

平野

溝口

長園

松井

同十枚  
同即

同五十枚  
同五

細川

廣額

坪内

小坂

多崎

園 全七

有吉

平野

溝口

長園

松井

同二十枚  
同三

破谷

稻津

坂本

後藤

白石

美野

市原

坂口

服部

深田

松平

同三十枚  
同四

同二十枚  
同三

尾田傳内

皆川武左馬

十河準之助

伴八郎兼

池田嘉三郎

吉田春六郎

柴田才次郎

堀田春馬

大野倉人

今村唯平

同 同  
同 同  
同 同

同 同  
同 同

同 同  
同 同

同 同  
同 同

松平出羽守家康

同 同  
同 同

同 同  
同 同

石原孫八

空月鬼毛

酒井孫三郎

坂永左左馬

比良才左馬

高橋敏左馬

磐津春助

同封 存六全中 所取 振八存五中

右左衛門 同紙 振五中 所

同月廿二日

松平伊豆守家

銀三十枚  
時辰三

深井左衛門

同三十枚  
同三

大河内市郎

西村次左衛門

御柄孫左衛門

同十枚  
同二

井左才左衛門

加治清左衛門

安松八郎

同三十枚  
同三

本多嘉大補家

本多雄治

岡本三左衛門

同二十枚  
同三

伊奈孫五郎

石川陣左衛門

村瀬勇左衛門

小野三藏

栗波良藏

土方維敏助

水野助左衛門

名津清左衛門

石川清左衛門

今津八郎

高田彦助

同十枚  
同三

水野出羽守家

同三十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二十枚  
同三

同十枚  
同二

同三十枚

松平甲斐守家系

松平坦見

同四十枚

今井彰左馬

同二十枚

萩原亞左馬

同三枚

上野伴助

同二十枚

濱色菅野

同二枚

清水権左

久城準助

跡部左三郎

同十枚

宮川軍兵衛

同二十枚

辻七郎左馬

同三枚

大久保仙九家系

同十枚  
同十枚  
同十枚

竹内春左馬

小川左三郎

山本春助

志賀弥平治

松中良吉馬

服部共越三郎

日中初春吉馬

年禮三郎馬

服部共八郎

大橋秋三郎

同十枚  
同二枚  
同二枚

同十枚  
同二 相織元

井澤門吏

迎夜左部

山中殿左部

尾崎梁吉郎

宮澤芳吉郎

大西泰次郎

一丸左十郎

跡崎泰吉郎

関平次吉郎

濱色兵衛吉郎

同三十枚  
同三

同初修書吉郎

同二十枚  
同三

太田泰七郎

町野半助

森戸金七郎

高木應助

滝 半六郎

若原越前

家加次左吉郎

高松左三郎

加藤源吉郎

市原次左郎

同十枚  
同二

同初修書吉郎

同三十枚  
同二

同二十枚  
同二



同十枚  
同二

同三十枚  
同三

同二十枚  
同三

同二  
同二

工藤市左衛門

小澤平次

繪田一郎

牛久保甚重

石原内苑進

富永十九郎

柳澤九左衛門

神谷 貞

松坂保孝

笹田安吉

松平之儀以家名

秋元恒吉家名

同三十枚  
同三

同二十枚  
同二

同十枚  
同二

同三十枚  
同三

同二十枚  
同二

矢貝清重

山俣七郎

大津又三郎

塚城平次

大橋守重

高野等五郎

九鬼求馬

蜂屋重平

蜂屋七郎

水谷武重

九鬼長門守家名

同十枚  
同二枚

赤松小源次

天師準之助

井上八郎左衛門

小島十次郎

水谷市左衛門

大多和太左衛門

梶田源左衛門

上原作之助

田村進六

荻田百助

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

同十枚  
同二枚

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

同十枚  
同二枚

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

水師左衛門家系

内務省後宮家系

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

同十枚  
同二枚

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

同十枚  
同二枚

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

同十枚  
同二枚

同三十枚  
同三枚

同二十枚  
同二枚

加納重江家系

酒井大和守家系

新倉丹後守家系

丸山四郎左衛門

永井楠五郎

鎌田若左衛門

大久保造酒造

安藤孫四郎

長崎仁左衛門

田中耕之進

柴田管一

新倉文次左衛門

窪田三平

同十枚  
同二

子塚源治

同三十枚  
同三

高木林多清

同二十枚  
同二

池田守三郎

同十枚  
同二

重井成三郎

同三十枚  
同三

三好猪作

同二十枚  
同二

山上 登

同十枚  
同二

小川 登

建初内五氏家系

市橋卓爾

同三十枚  
同三

永井信三郎

同二十枚  
同二

矢崎幸三郎

同十枚  
同二

浅田十郎重光

戶田後崎吉家系

中津勘吉重光

同二十枚  
同二

千本仁吉重光

同十枚  
同二

北村平三郎

大園紀伊守家系

植村孫一郎

同三十枚  
同三

須藤左伸

同二十枚  
同二

山本左三郎

同十枚  
同二

山本健齋

同三十枚  
同三

平田武英

同二十枚  
同二

鈴木庄三郎

同十枚  
同二

牧中謙平

同三十枚  
同三

矢野伊吉郎

同二十枚  
同二

氏家平馬

同十枚  
同二

市原文九郎

青木七郎

同三十枚  
同三

松前内親

同二十枚  
同二

志保又左衛門

同十枚  
同二

三村周太

因崎共三郎

西丸抄考後序上ヶ合中... 松前志摩守家系

同三十枚  
同三

石田尚書家系

同二十枚  
同三

関庄三郎

同十枚  
同二

河合勘兵衛

松井新八

同二十枚 羽織

久世大和守家来

矢崎孫六  
本村六左衛門

杉山周記

同二十枚 羽織

山路慎十郎

同十枚 羽織

榎井信八郎

同三十枚 羽織

内谷紀伊守家来

小田豹永  
本村平左衛門  
久永勘玄  
牧師、邦親

同二十枚 羽織

同十枚 羽織

近者准吉

永田又三郎

中崎平左衛門

山田須左衛門

同三十枚 羽織

板倉 工

横矢庄平

同二十枚 羽織

石坂泰平

柏原庄助

同十枚 羽織

崎田準之助

國分軍平

同三十枚 羽織

安藝野古家集

松本古門

同二十枚 羽織

尾川又吉

同十枚 羽織

水生小六郎

同三十枚 羽織

土岐山藏古家集

水野三藏

同二十枚 羽織

佐藤久吉

岩松高吉

同十枚 羽織

月園修理

二階堂貞

同二十枚 羽織

三橋代進

堀田次左衛門

同三十枚 羽織

奥田致左衛門

西村勘助

同二十枚 羽織

香居帶刀

小崎映

同二枚 羽織

鈴木貞

服部庄左衛門

下村六郎

同十枚 羽織袴

沼津丸左衛門

同三十枚 羽織袴

壺井鉄右衛門

同三十枚 羽織袴

大塚出雲守家系

横山兵右衛門

同二十枚 羽織袴

無澤官左衛門

同十枚 羽織袴

宮崎權平

同二枚 羽織袴

糟屋市左衛門

同三十枚 羽織袴

堀田忠房家系

二本松右衛門

同二十枚 羽織袴

周部左衛門

同十枚 羽織袴

春多阿右衛門

同二枚 羽織袴

岡崎五右衛門

同三十枚 羽織袴

新庄日敏家系

萩原右衛門

同二十枚 羽織袴

萩原守

同十枚 羽織袴

柳永守

同二枚 羽織袴

岩原清右衛門

西元新庄の大奥向所普請所用羽織袴

本於檜 間缺部

前ノ三月十九日尾ノ老成瀬ヲ始ト。末新庄氏ノ家來ニ至テ人  
員四百三十二人。所賜ノ銀合テ一萬三百八十枚。其當金ト比レ  
ハ七千四百三十九鐐。賚服總テ千二百七十八襲。羽織二百七許

多下雖氏官家ノ物トハ必分ナレテ

同月廿三日

時辰三

多合

堀田彈正

西九所番格<sup>上</sup>合仕<sup>上</sup>所用途<sup>上</sup>在<sup>上</sup>候<sup>上</sup>存<sup>上</sup>下<sup>上</sup>

同

同

金田貞之助

同封<sup>上</sup>合仕<sup>上</sup>所用途<sup>上</sup>在<sup>上</sup>候<sup>上</sup>存<sup>上</sup>下<sup>上</sup>

右於菊<sup>上</sup>間掃<sup>上</sup>初<sup>上</sup>以<sup>上</sup>老<sup>上</sup>中<sup>上</sup>列<sup>上</sup>在<sup>上</sup>後<sup>上</sup>中<sup>上</sup>守<sup>上</sup>之<sup>上</sup>若<sup>上</sup>年<sup>上</sup>若<sup>上</sup>中<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>在<sup>上</sup>

侍<sup>上</sup>性<sup>上</sup>組

加<sup>上</sup>番<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>給<sup>上</sup>守<sup>上</sup>組

田中唯一

用<sup>上</sup>束<sup>上</sup>毛

官<sup>上</sup>内<sup>上</sup>御<sup>上</sup>用<sup>上</sup>人<sup>上</sup>名<sup>上</sup>守

足田兵庫

同封<sup>上</sup>合仕<sup>上</sup>所用途<sup>上</sup>在<sup>上</sup>候<sup>上</sup>存<sup>上</sup>下<sup>上</sup>

侍<sup>上</sup>書<sup>上</sup>院<sup>上</sup>番

朽<sup>上</sup>本<sup>上</sup>御<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>守<sup>上</sup>組

箕目左十郎

同封<sup>上</sup>合仕<sup>上</sup>所用途<sup>上</sup>在<sup>上</sup>候<sup>上</sup>存<sup>上</sup>下<sup>上</sup>

右於<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>在<sup>上</sup>守<sup>上</sup>初<sup>上</sup>登<sup>上</sup>縁<sup>上</sup>類<sup>上</sup>款<sup>上</sup>若<sup>上</sup>中<sup>上</sup>守<sup>上</sup>之<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>在<sup>上</sup>同<sup>上</sup>前<sup>上</sup>

同月廿九日

報<sup>上</sup>而<sup>上</sup>枚<sup>上</sup>羽<sup>上</sup>織

屋<sup>上</sup>敷<sup>上</sup>家<sup>上</sup>老

竹腰山城守

西九所<sup>上</sup>番<sup>上</sup>格<sup>上</sup>和<sup>上</sup>向<sup>上</sup>大<sup>上</sup>奥<sup>上</sup>向<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>番<sup>上</sup>格<sup>上</sup>所用途<sup>上</sup>在<sup>上</sup>候<sup>上</sup>存<sup>上</sup>下<sup>上</sup>

右於<sup>上</sup>美<sup>上</sup>等<sup>上</sup>間<sup>上</sup>掃<sup>上</sup>初<sup>上</sup>以<sup>上</sup>老<sup>上</sup>中<sup>上</sup>列<sup>上</sup>在<sup>上</sup>後<sup>上</sup>中<sup>上</sup>守<sup>上</sup>之<sup>上</sup>侍<sup>上</sup>在<sup>上</sup>

○小臣等<sup>上</sup>が<sup>上</sup>話<sup>上</sup>ヲ<sup>上</sup>傍<sup>上</sup>聽<sup>上</sup>セ<sup>上</sup>ハ<sup>上</sup>先<sup>上</sup>頃<sup>上</sup>或<sup>上</sup>御<sup>上</sup>山<sup>上</sup>中<sup>上</sup>ニ<sup>上</sup>テ<sup>上</sup>御<sup>上</sup>坎<sup>上</sup>ヲ<sup>上</sup>深<sup>上</sup>ク<sup>上</sup>穿<sup>上</sup>



タルニ地中ヨリ蛇ノ蟄セシヲ無<sup>イッソトナク</sup>數掘出タシタリ何ナレニ工ニ斯ク  
饒ク地底ニ有シカ

○先年淇園先生ノ話リシイヲ憶出シタレバ云フ世ノ忠臣藏十  
段目ニ天川屋儀兵衛ト云アリ其實ハ尾崎屋儀兵衛ト稱ル町  
人ナリ大石ガ復讐ノハ大改ニテ鑠惟子ヲ數多造リタル工彼  
町奉行コレヲ疑ヒ彼所へ呼出メ尋問シガ其工言ハズ因テ增  
々疑ヒ頗ル野心ノ恐有テ後ハ拷問ニ及ビ種々責タリシガ一向ニ白  
状セズ因テ姑ク其工ニ入牢メ在シガ大石吉良ヲ討取タル便聞  
コトタル儀兵衛牢内ヨリ先日ノイ白状申サント自ラ訴ル工奉行  
呼出シ何<sup>イカ</sup>ト云フニ答フ先日御吟味ノイハ某大石殿トハ別メ懇ナ

リシ工工彼ノ一件ノ刻追テ夜討用意料込斯ク云ツケラレヌ然ルヲ  
御不審ヲ受ケ御尤トハ思候ヘ凡右ノ如ク受合井タル工事成就  
トテ露頭ヲ恐レ申上ズ有タルガハヤ敵ヲ討取タルハ今ハ仇ハ無ク  
ト白状ヲ願タリト申述タルバ其坐ノ人々奉行ヲ始メ與カ同心ニテ  
悉ク落涙メ迺儀兵衛ガ咎ハ赦免セラレシト又先生曰コノ儀兵衛  
老年ニ及ビ其時ノイヲ人ニ語り偏袒<sup>カクシ</sup>テ視スルニ背<sup>セナカ</sup>ノ肉中ヨリ<sup>ナリ</sup>鉛<sup>ナリ</sup>ニ  
ニ歩ツク残りタルガ有リシト是ハ白状セザレバ鉛<sup>ナリ</sup>ヲ肉中ニ流シ入レタ  
ルイトゾ何<sup>ナリ</sup>ニモ義氣ノ豪傑ナリク此ハトドカ先生目撃ナリシカ  
目撃ノ傳説カ忘レタリ

○北郊ノ王子稻荷當年ハ開帳ニテ時節モ好ク近處ナル飛鳥山モ

開花ナレバ人々群詣メ神前モ甚賑ハヒケル其井飛鳥山モ觀花ノ  
頃ナレバ諸客來湊メ徘徊混走セリ或息女モ其中ナリシガ從婢  
モ少カラザルニ又醉漢ト覺シク簇到テ彼息女ヲ擁メ頼ヲ啗リ  
因テ息女ニ從フ侍士カヲ拔テ其男ヲ斬タリト是等至治ノ所作ナ  
ル當

○宗耕ガ云ケルハ可兒才藏寶藏院ニ逢テ云ニ我元來鎗法  
ヲ知ラス鎗ハ何ニ勝シ得ルヤト院答上段下段相カブリノ外ナシ  
才藏解ラズ主人福嶋左衛門大夫ヘコノ術ヲ習ハント告ク福  
嶋許ス可兒迺南都ニ往テ院ニ斯術ヲ習フ一日有リ歸テ戰  
場ニ赴クニ還テ怯心起テ進ムニ難シ因テ復南都ニ往キ實

ヲ以テ告グ院曰知ルイ未ダ半也可兒更ニ學フイ數月得テ歸ル  
是ヨリ敵ノ槍道ヲ視ルイ明ニ迺我カ勝路ヲ得タリト

又コノ寶藏院今ニ繼目ニ關東ニ下テ拜禮ヲナス此時僧ノ從ニ  
鎗ヲ持タスト寶藏院退隱メ八觀音院ト号ス

又コノ院ニテハ十文字トハ稱セズ月劔ト呼ブコレハ元祖寶藏院ハモト  
直鎗ナリシガ或井八日ノ月影水面ニウツルヲ視テアハレ直又ニ斯ク  
横手ヲ加ヘン者シト因テ十文字ノ形ヲ作テ月劔ノ名アリト云

○予カ別莊以前ハ品川ノ近ク蛇窪ト云地ニ在シト語りシ新  
九郎聞テナルホド斯ル處モ聞ケリ又品川ノ奥ニ酒肆アリ人  
猫酒家ト呼ブ其工エハコノ酒屋初ハ貧カリシガ何カ猫ノイヨリ

子庚

身上善ク成テ遂ニ富ニ至レリ。因テ今猫ヲ養テ已ニ四五十頭ニ及ベリ。抵テ見ルニ屋上ニ踞ル者アリ。睡ル者有リ。店頭咬合者アリ。群聚戲游。目前ニ種々ヲ為ス。又。店面ニ猫屋ヲ構フ。其中ニ集食ス。予聞テコレヲ觀ニテ欲セリ。

○今年四月九日ニハ。右大将様御疮瘡御平愈ニ因テ高田ニテ流鑄馬アリ。同姓金弥モ騎手ニテ。其棧鋪ニテ見物セヨト請フ。ユエ赴シガ生憎前日雨降テ其夜ヨリ暗色ヲ呈セバ。打寄彼是ト申合テ何レニモ興行ト彼池ニ往タリ。然ルニ馬場モ騎スベク見ヘテ見物ノ諸人モ群集シヤガテ事モ行ハレニヤト爲ル中。云觸ラスハ今日ハ騎射延引ナリト。因テ何かバヤト待井タルニ果

メ御延引ト申令ヌ。サレバ居テモ詮ナシト。直ニ上水ノ流ニ遵ヒ。護國寺音羽町ヲ左ニ見テ急ギ還レリ。是ヨリ再興行ノ井モ有ルベシト念井シガ十日ニ逮ンテ十八日ニ行ハル當シト沙汰セシガ其日ニ至レバ予ハ外邪ニ侵サル赴難キニ亦狂塊砂ヲ倦キ草木偃スル体ナリシガ。鑄射ハ滞ナク事畢レリト聞コヘテ芽出多木御イ也ト悦思ヘリ。サテ過シ九日延引ニ成シユエテ其頃人口ニ流言スルハ例カル時ハ官ノ御馬役ヨリ馬場ノ善アシヲ見分スルイナルガ此度モ昨雨ユエ當日馬場ハ乾タレド。右大将様御側衆某新見伊州トカ御馬役ニ令メ馬場見分シメタレバ馬溝宜シカラズト申上テ延引トハ成レリ。畢竟是等モ騎者方小笠原氏ヨリ。前雨ナレド期日

ハ馬場宜シト申上テ其日モ騎人皆集リタルカ御側衆某ヨリハ  
念ノ爲御馬方ニ申聞テ試乗ラメタルニ御馬方ニテハ宜キト言上  
メ自然落馬等有レバ御馬方ノ不念ニ遠ブユエ何モカル中試  
アレバ不宣ト云イ也ト予モ彼地忝着ノ中ハ馬場ノ体ハ傍觀ナレバ  
分ラサレド前雨ノ餘若ヤ潦有リテ落馬ノ者モ有ラバ御祝ノ神射  
何カバナラント訝念シガカル延引コロ重テ興行整シウハ風聲  
水音幾重ニモ恭悦ナルイ也

天保  
十年

○隣火ノ爲ニ家居ヲ焚亡シハ過シ己亥ノ三月二日ナリ斯時火盛  
ニ成レバ防グ當キ手立モ盡園中ヲモ行難ク臣舎ノ間ヲ經テ  
騎射スル馬場ニ避井シガ早クモ鳥越ヨリハ此邸へ退クベキト云

コシケルヲ今暫シト云ウチ日モ己ニ没シヌレバ老臣浦上ガ舎ニ休憩  
シ夫ヨリ惟フ迎モ往テモ還ルベキ由モ莫シト決定メ近クナル天祥  
庵モ燒炎延ビタルカ幸ニ恙ナケレバ母公終焉ノ處ナリイガヤ一夜  
ヲ明サント守僧ノ居シモ天祥寺ノ方へ遣リテ從婢二十餘人左右  
臣小火六七輩ヲ率ヘテ初夜ノ頃ニツ彼ノ淨庵ニ入テ上下ノ眠處  
トハナシヌ夜モハヤ曙色ニナレバ住馴又處ニ諸人ウチ集一日二日  
モ分ラデ明暮ヲ過セシニ十一日ニハ晡時ノ前林内史窮居ノイヲ  
思ヒ訪來ラレ車馬不拜ノ談ヲナシ臣妾ノ勞ヲ想トテ還出ヌ深  
切トス又是ヨリ前九日ニハ午時ノ頃中野石翁俄ニ訪ヒ此度ノイ  
何如々々トテ懇辭多々ナリシ其中誠ニ有合ノ物也急ナルイ

ナレバ是ヲ恭テ述、時繪セシ尋常ノ文連ノ大ナルヲ携フ。迺啓キ  
視ルニ内外ニ常賜セラル時服ト謂ニ非ズ。一ハオナドチヤ間青色ノ縹緲、淺  
黄、裏ナルニ葵御紋ヲ小形ニ染出シ。一ハ萌黄ト白絲、縱横ナル小  
格子ノ縮緬ニ亦淺黄、裏一ハ素ノ琥珀地ナル帶ニ紫モテニ引軻  
ヲ織出セシナリ。翁曰、御小袖ニハ、大御所公ノ御着服、御帶ハ、  
當公方様ノ御着ナリ。俱ニ某拜領メ有シヲ。俄ノイナレバ君ニ轉進スル  
也。逆諄々ト語話ノ出還レリ。予逆疑フ。石翁コノ贈有ル。唐ナラズ。  
若クハ去歲西城炎上ノ後、予思フ人情ニ卑高ナシ。大御所公尊惠  
深察スレバ、セメテハト。翁ト謀リ、其内慮ニ隨テ、些少ナガラ、小判金  
二百枚ヲ上リシガ、俗事モ亦貴賤ナケレバ、今年清カ居室ヲ燒カ

レタルニ因テ、或ハ其御返報ニ、翁ニ内命爲ラレシカト。翁ニ從ヒ來ル  
藝花ノ平作ハ、予舊來ノ好ミ有ル者ナレバ、翁ノ贈、内實、奈ント  
問タルニ、曾テ予ガ推思ノ如クナラズト答フ。因テ此漢モ、翁ガ旨  
ニ應メ秘スル乎ト訝リ、書モテ林内史ニ質。内史又密ニ翁ニ  
聞クニ、實ニ其意ニ出テ、内旨ニ非ズト。清因テ惟フ。若シ内旨  
ナラバ、誠ニ孫子ニモ傳ヘ、患難ヲ憐メ、御厚誼ヲ貽サント思シガ。  
徒々翁ノ志ナラバ、懇交ノ事態、常惠ナリ。サレドカ、ル災遭、他  
器ニ非ズメ、尊者ノ貴服ヲ獲シハ、天ナリト。迺其圖ヲ寫メ、來  
嗣ニ示ス。

其圖



考者通河長壽作蔭在初念公。相又世祖在也。即方  
 贈小之。之修在初念公。一壹氣所。風味也。遠少。即也。雞計  
 若遠之。即言。一。只寸。惘。如。是。沙。其。相。不。

孟英林之

印宗

附書

派英榮為裏印丁。同接廣。宗。在。代。判。次。屬。一。也。

醫師 松平一節

英子 百廿八才

正德五年未七月出生

女房 尾上

英子 三十八才

娘 中実

英子 十八才

子 三亮

英子 十四才

先妻英子も。少。好。老。年。及。古。人。之。威。下。中。心  
 百歳。之。百。男。女。出。生。目。出。分。壯。健。之。老。人。之。係。余。程  
 賢。強。親。父。之。以。一。第。一。

自先の。口。上。の。相。出。の。好。く。以。安。祥。矣。相。之。浪。華。集  
 より。連。長。壽。之。名。記。相。之。好。且。老。松。の。也。一。市。名。亦

平戸宮前新制  
粟水館

前好し。文早拙年齢より八百も云々あり。浪華と  
記ハ海魚ヤル。中一三市をハハ。派ハ浪華制ハ。洲濱珠  
美味牙今初夕々。夢味忘老中ハ。厚謝中を。将老史  
愚論ハ。孟経ハ所云。殊壽不貳。脩身以俟之。所以立命也。  
り。う。淨者ハ安心あるハ。き。う。往來ハ。於ハ。ハ。賢。

卯月廿九日

老檀

於此一壺ハ。平戸到本。新制ハ。中。殊。委。案。洲。濱。ハ。報。謝。と  
いハ。乃。ハ。ハ。ハ。ハ。後。日。接。兄。と。ハ。中。殊。ハ。ハ。と。

拙按ルニ其妻不審ナリ。後妻ナルハ前文ニ見ユ。其名ニ拙ハ。娼力  
其子ハ彼婦ノ生ナレバ。年若キ識ルベシ。又一齋。慈眼大師ト比

スレバ。尚弟ナリ。サレド。長子先妻モ老年ニ逮ビ没スルハ察ス  
ベシ。又百歳上ノ男女子ハ大師モ亦能ハズ。殊ニ歎嘆トス。





